

平城京左京三条三坊一・二坪の調査(平城第478次)

国営歴史公園化以後、平城宮跡は国土交通省による整備事業が開始されています。この計画の中で、復原された朱雀門の南東の敷地には、「平城宮跡展示館（仮称）」の建設が予定されています。本調査は、その建設の事前調査で、当地の遺構面の高さや、遺構の残存状況の確認を目的としています。調査区は、南北103m、東西10m、面積は1,030㎡、調査期間は、2010年12月20日から2011年3月30日まででした。

調査地は、平城京左京三条三坊一・二坪にあたり、西隣は史跡朱雀大路跡として整備されています。これまで調査地の西辺では、奈良文化財研究所や奈良市教育委員会による発掘調査がおこなわれており、一坪と二坪の間を通る三条条間北小路や、一坪内をほぼ南北に二分する東西道路などを確認しています。また、一坪の外周には想定される位置に築地塀などの遮蔽施設がなかったとみられ、朱雀門にもっとも近接したこの坪の特殊性が注目されていました。

調査では、上記の三条条間北小路や東西坪内道路



調査区と朱雀門、第一次大極殿（南東から）

の延長部分の遺構が、想定される位置で検出され、また、三条条間北小路に面する一坪の南辺でも築地塀などの遮蔽施設がないことを確認しました。

さらに、調査区の中央付近、東西坪内道路のやや北側では、非常に巨大な井戸を検出しました。

この井戸は上下二段に分かれ、上段は内法2.4mの正方形、下段は一辺約1mの六角形という、非常に特殊な構造でした。上段は最下部の土居桁のみが残存しており、井戸枠はすべて抜き取られていましたが、下段の井戸枠はすべて良好な状態で残っていました。井戸枠を詳しく見ると、上下段とも隅に柱を立て、柱に溝を切って、そこに横板を落とし込む構造で、奈良時代の技術の高さがうかがえます。また、上段と下段の間には、こぶし大の玉石を敷き詰め、底面の保護をするとともに、見栄えを良くする工夫をしています。井戸の深さは、遺構検出面から下段の底面まで2.6mでした。下段の埋土からは、奈良時代の土器をはじめ、瓦、木製品、金属製品、木簡など、多種多様な遺物が出土しています。これらは土ごとコンテナに入れて持ち帰り、現在も整理・洗浄作業がおこなわれています。この特殊な井戸の機能に関しては、これらの出土遺物の整理をまって、総合的に検討する必要があります。

また、調査区の北端では、掘立柱建物の一部が確認されていますが、全体としては遺構の密度は高いとはいえ、この場所がどのような性格であったかは、今後おこなわれる周辺の調査により明らかになっていくことでしょう。

朱雀門の目の前にあるこの一等地を、どのように使っていたのか、今後の調査にご期待ください。

（都城発掘調査部 大林 潤）



二段組みの井戸（西から）